九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

殷周時代における長江中流域の青銅器文化の形成と展開

譚，永超

https://hdl.handle.net/2324/4784370

出版情報：九州大学，2021，博士（文学），課程博士
バージョン：
権利関係：

（様式３）

氏　　名　：譚 永 超

論 文 名　：殷周時代における長江中流域青銅器文化の形成と展開

区　　分　：甲

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、殷周時代における長江中流域の青銅彝器（酒器、楽器、容器）の検討から、当時の地方型青銅器文化の展開過程を解明するものである。第１章では先学の成果を整理し、本論で目指すべき解明事項・資料・方法を提示した。従来の諸研究では、中原青銅器文化の周辺地域への拡散など、中原を主体とする部分が主に注目され、長江中流域の社会変化も、単純に中原青銅器文化の影響によるという説明が多かった。したがって、中原をはじめとする外部要素を受容した在来集団の主体的動向は、必ずしも明らかではなかった。本論文の着眼点はここにあり、長江中流域青銅器文化の在地集団の社会動向を、他地域に比較できる形で把握することを目的としている。そのために、各種青銅器の製作技法を中心とする系譜関係、および、各社会集団による青銅器の消費様相を、客観的に把握することに努めた。

第２章では、地方型青銅器の盛酒器（尊・罍）を取り上げた。殷文化の要素が、長江中流域に直接的に流入するのが盤龍城類型文化であるが、この文化の衰退をきっかけに、青銅尊・罍の在地生産が始まったことを指摘した（殷墟２期併行）。殷墟３期～殷末周初期にかけて、これらの生産が拡大され、形態・文様の大型化、単数埋納という地域色も認められるようになる。これが長江中流域における地方型青銅器文化の開始状況である。

第３章では、長江中流域の代表的器種とも言うべき青銅鐃を取り上げた。青銅鐃は、殷文化の小型青銅鐃に遡るが、長江中流域においてはこれを自律的に選択し、地方型青銅尊・罍の文様要素と組み合わせつつ、大型青銅鐃を出現させた。大型青銅鐃の発展は、殷墟４期あるいは殷末周初期併行における、青銅尊・罍の衰退と軌を一にする。そして、西周以降、西周文化の青銅甬鐘との類似性が次第に高まり、青銅甬鐘に置き換わっていく様相が看取された。

第４章では、地方型青銅甬鐘を検討した。長江中流域は、中原からの強い影響を受けつつ、甬鐘を独自生産し始めたが、従来の大型青銅鐃と同様の機能を持ち、かつ埋納による消費が続いた。しかしながら、同段階の大型青銅鐃の分布差があり、中原地域の関連性が高い湘江流域の優越性が捉えられた。西周後期併行には、系統を異にするＡ型甬鐘とＢ型甬鐘の流通差が明瞭となる。さらに、大型青銅鐃の消失や、地方型青銅鼎の副葬品としての利用が先学で指摘されており、何らかの関りが考えられる。

第５章では、地方型青銅鼎の展開を検討した。殷末周初期～西周後期併行では、青銅甬鐘とともに、中原型青銅鼎も長江中流域に搬入され、在地生産が開始された。西周後期併行～春秋前期では、長江中下流域の地域ごとに地方型青銅鼎が定着し、春秋中期には、長江下流域が長江中流域に強い影響を与えた。さらに春秋後期後半～戦国前期頃には、地域色の希薄化に伴って、楚系青銅器が出現していることが認められるようになる。

第６章では、第２章から第５章までをまとめ、地方型青銅器とその出土状況の変遷に基づき、

当該地域の社会像を提示した。長江中流域の青銅器文化全体は、5 期に区分できる。また、中原との地域間関係による長江中流域青銅器文化の展開に基づいて、青銅器の扱われ方の検討によって、内的階層化が進展する様相を明らかにした。

以上に基づき、長江中流域の青銅器文化の展開は以下のように纏められる。第Ⅰ期（殷墟 3 期～西周中期併行）に大型青銅器が本格的に在地生産・消費されるようになった。同時期の中原では、青銅器は身分秩序を示すものであったが、長江中流域では、青銅器は共同体の集団祭祀を示すものとして利用された。第Ⅱ期（西周前期～中期併行）の長江中流域の殆どの地域は、引き続き集団の共同性を指向していたが、湘江流域に代表されるような、首長による階層構造を有する集団が分散的に出現した。第Ⅲ期（西周後期～春秋前期併行）には、西周の影響を強く受けつつ、地域全体で、青銅器を基にした階層秩序が形成された。これがピラミッド状のより発達した階層構造として確立するのが第Ⅳ期（春秋中期～後期前半）である。そして、第Ⅴ期（春秋後期後半～戦国前期）には、ピラミッド型の階層構造が、楚国におけるより大きな秩序の下に組み込まれた。このように、長江中流域においては、中原各時期の社会制度が直接的に移入されていたわけではなく、在地集団の社会動態に従う形で、青銅器をはじめとする中原の各文化要素が受容されていたのである。本論では、長江中流域の社会がこうした自律的かつ複雑な変化を経て、ついには楚、秦という領域国家に併合されるプロセスを示したものである。本論の結果や視点は、同じく中原の影響下にありながら独自の発展を遂げた中国周辺地域の歴史復元に貢献することが期待される。